

平成 9 年度人工礁漁場造成事業効果調査委託事業（抄録）

金田佳久・上田幸男

陸上に設置された漁場監視レーダーを用いて、魚礁の設置された海域における操業船の隻数および位置を正確に把握するとともに、並型魚礁の生産効果について調査を行った。

なお、詳細は「平成 9 年度人工礁漁場造成事業効果調査報告書」を参照されたい。

標本船による調査結果による調査結果によると、漁場区別漁獲割合は人工魚礁区で 32.0%、天然礁区で 68.0%であった。漁獲金額割合は人工魚礁区で 37.4%、天然礁区で 62.6%であり、操業時間割合は人工魚礁区で 32.8%、天然礁区では 67.2 であった。

魚種別にみると、天然礁区での割合が高いのはイサキおよびブリ、並型魚礁での割合が高いのはタイ類およびアジ類であり、例年と同様の傾向を示した。ただし、タイ類の漁獲量は低水準であった前年をさらに下回った。

試験操業においては、魚礁 No. 1 では 11.5kg、35,857 円、魚礁 No. 2 では 11.9kg、14,291 円、魚礁 No. 3 では 14.7kg、23,974 円の漁獲であった。魚種別にみると、マダイ、その他の魚種、カサゴの順で多かったが、マダイの漁獲量は前年の 37%と低水準であった。

漁場監視レーダーの記録から読み取った並型魚礁の延べ操業隻数は、魚礁 No. 1 では 98 隻、魚礁 No. 2 では 276 隻、魚礁 No. 3 では 102.5 隻であり、操業時間数からみた魚礁の利用は、魚礁 No. 2、魚礁 No. 3、魚礁 No. 1 の順で多く、最も利用の多かったのは、例年と同様、魚礁 No. 2 であった。

並型魚礁の生産効果を推定するために、1 時間当たりの漁獲量および漁獲金額を延べ操業隻数で引き延ばしたところ、魚礁 No. 1 で 14.7kg、42 千円、魚礁 No. 2 で 39.2kg、46 千円、魚礁 No. 3 で 9.1kg、20 千円であった。一方、時間帯により釣れ具合に差があると考えられることから、時間帯別の漁獲量および漁獲金額を時間帯ごとの延べ操業隻数で引き延ばし生産効果を推定した。その結果、推計された漁獲量および魚獲 No. 1 で 18.3kg、43 千円、魚獲 No. 2 で 46.2kg、49 千円、魚獲 No. 3 で 13.8kg、20 千円であった。

後者の方法で得られた生産効果を、年間の魚礁 1 空 m³ 当たりのそれに換算すると魚礁 No. 1 で 0.10kg、240 円、魚礁 No. 2 で 0.26kg、265 円、魚礁 No. 3 で 0.08kg、113 円であった。

標本魚協の一本釣漁業の水揚状況および標本船の調査結果から、今年度はマダイの漁獲が極端に少なかったと思われる。マダイは並型魚礁での最重要な漁獲対象種と考えられ、マダイの漁獲が少なかったために並型魚礁の利用が少なかったと推察された。このため推計された並型魚礁の生産効果は、低水準であった前年度をさらに下回った。